



リンパ浮腫とは

乳がんや婦人科・消化器・泌尿器科などの悪性腫瘍と共にリンパ節を切除することで、リンパ液の流れやリンパ管が途切れてしまい、圧迫などによりリンパ液が滞り、むくみが生じた状態をリンパ浮腫といいます。浮腫が進行すると、手足の重さやだるさが増すばかりでなく、皮膚の抵

抗力も落ちるため、軽い虫刺されやひっかき傷で皮膚が炎症を起こし「蜂窩織炎」を起こしやすくなります。

リンパ浮腫は一度発症すると完治させること、また予防することが難しいため、皮膚を清潔に保ち、保湿剤を塗って乾燥を防ぐスキンケアが

とても重要となります。浮腫の兆しを初期の段階で見つけ、これまでの生活の改善、適切なケアを始めることで悪化を予防することができます。異常を感じたら、まずはかかりつけの医師にご相談ください。

リンパ浮腫看護専門外来について

がん治療の合併症として起こる「リンパ浮腫」の症状に悩む患者さんに対し、浮腫症状の軽減や日々の生活で抱えている悩みに寄り添い支援するために、2014年よりリンパ浮腫看護専門外来を開設しました。現在、形成外科の担当医師がリンパ浮腫の診断を行い、セラピスト（看護師）が症状の把握、浮腫を起こした原因、生活の状況を確認し、医師と共に総合的に評価して治療方針を決定していきます。形成外科でリンパ管静脈吻合術という浮腫症状を緩和する手術も行っているため、さまざまな視点からお悩みへの対処方法を提案しています。

リンパ浮腫看護専門外来では、複合的理学療法と呼ばれる「スキンケア」「用手的ドレナージ」「圧迫療法」「運動療法」の4つの方法を組み合わせ、浮腫の軽減を図っていきます。ケアの際は患者さん1人1人の生活環境、仕事、家事、育児、介護などのライフスタイルを確認させていただき、個別性のある治療方法を一緒に考えていきます。浮腫があることで、これまで大切にしていた趣味や仕事を手放さなければならぬといったことがないように、浮腫をコントロールしながら生活に工夫を加えて、できるだけ今までの生活が維持できることが大切だと考えています。提案する具体的なケア内容は、皮膚の保湿剤の選択や保湿方法、体重管理、運動などの生活指導、セルフリンパドレナージの方法、弾性着衣の選択を行っています。また、浮腫の程度に応じて、用手的ドレナージも行っています。



リンパ浮腫看護専門外来は、毎週月・水・木曜日の3回、完全予約制で行っています。対応している患者さんは、福岡大学病院で腋窩、骨盤内のリンパ節郭清術を受けた方となっています。リンパ浮腫に関するお問い合わせは、当院かかりつけの各診療科外来にお尋ねください。



リンパ浮腫セラピスト（看護師）

光野 由利子 藤浦 奈都子 綱分 裕美

みつの ゆりこ

ふじうら なつこ

つなわき ゆみ

福大病院 ニュース

Fukuoka University
Hospital News

No. 114

2021
新年号
WINTER

1 2021年度 新年のごあいさつ

謹んで新春をお祝い申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症対応に追われる日々の中、関係する皆様の創意工夫と結束力に感動する年でもありました。一年間の皆様の努力に心から感謝いたします。まだまだ収束には時間が必要ですが、引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

2021年の干支は「辛丑（かのとうし）」です。辛とは植物が枯れて新しい世代が生まれようとする状態で、丑（牛）の特徴は粘り強さと誠実です。私は、世界を一変させた新型コロナ禍から、徐々に立ち上がり日常を取り戻すことを連想しています。

さて当院は、組織がどうあるべきかという最も基本となる考え方に「あたたかい医療」を掲げ、組織の存在意義を示しています。特定機能病院としての役割は勿論のこと、患者さんに寄り添った医療を提供し信頼を得ることが必要です。ではどうしたらより良い病院ができるのでしょうか。

目的が理由の集団（group）では、理念や中長期的目標を共有できず、多様性に欠けた組織になります。一方で、達成すべき目標やアプローチなどを共有し連帯責任を果たせる補完的スキルを備えた集団（team）では、シナジー効果が期待できます。

すなわち多くの良いチームが存在することで、良い病院ができることとなります。

福岡大学の病院は、経営改革方針に基づき「Team management」「Team network」「Team vision for the future」「Team cooperation」の4Tを柱に改革を進めています。特に経営基盤の安定が、優れた病院づくりには重要です。

福岡大学筑紫病院や福岡大学西新病院とも緊密な連携を行い、将来の魅力ある病院運営を考えていく必要があります。また医療の多様化により多くの部門を抱えたため、機能が低下し実態に合わないものも認められます。再編をしてスリム化が必要だと考えています。しかし新たな部門を新設することで貢献できるものもあります。今年は、このような組織再編に積極的に取り組んでいきたいと考えています。

待望の新本館建設も、本年1月から実施設計に移り、いよいよ今年の10月より着工です。2023年秋の完成を目指して急ピッチで作業工程を進め、その後に現在の新診療棟、西別館、救命救急センター棟、研修センター棟など一連の改修で魅力的な医療環境が整備できるはずですので期待ください。



次に「丑年」になるのは12年後の2033年で、次に「辛丑」になるのは60年後の2081年です。12年後には医学部の新築や60年後は次々の新病院が建設されていることと思います。この間にも医療は想像がつかないほど飛躍的な発展を遂げていくことでしょう。

福岡大学病院も持続的な発展が必要です。今年もその過程の途中です。ともに福岡大学Teamの力を結集し頑張りましょう。

また、福岡大学病院ホームページ内の公式YouTubeチャンネルでは、病院をさまざまな視点で紹介しています。是非ご覧ください。



福岡大学病院

病院長 岩崎 昭憲

いわさき あきのり

Open! 当院では、公式YouTubeチャンネル、Facebookを新たに開設しました!

公式YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCYwM03PwlaDYNvVXTXVUocA>

Facebook

<https://www.facebook.com/FukuokaUniversityHospital/>

福岡大学病院

〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目45番1号
TEL (092) 801-1011 (代) URL: <https://www.hop.fukuoka-u.ac.jp/>



2 看護部（外来）紹介 外来看護師の取り組み

患者さんの生活を見据えた外来看護

当院は高度先進医療の提供や医療技術の開発・評価を行う特定機能病院であり、地域に開かれた患者さん中心の医療を提供する急性期病院です。患者さんが住み慣れた地域で切れ目ない医療を受けられるよう地域医療機関との連携を大切に

しています。また、患者さんの生命力を最大限に引き出すことを医療チームで考え、患者さんやご家族の思いや生活を尊重した支援を行っております。外来では、医師やソーシャルワーカーなど多職種で、入院前から外来患者さんの退院後の生活を見据えた

在宅療養支援の検討を行っています。外来看護には、多様化する社会背景をもつ患者さんやご家族へ適切な医療を提供できるよう、倫理観や使命感のもと「あたたかい看護」を目指しています。

寄り添えることを大切に

外来は、病棟外来一元化体制のもと、各診療科の疾患に精通した病棟

の看護師が、関連外来で診療の補助や看護を提供しています。疾患の早期回復や療養生活の支援について、患者さんやご家族を中心にサポートできる看護体制を整えています。昨今は、新型コロナウイルス感染症の影響により、電話診療や予約変更の電話相談件

数が増えています。また、入院される患者さんは、面会制限により寂しさや顔を見られない不安を抱えながら、入院生活を送ることになります。この新型コロナウイルス感染症の新たな常識が私たちの看護を見直す機会となりました。患者さんやご家族との出会いを大切に、心に寄り添いながら、限られた機会の中で気づきを共有して満足度の向上につながるよう取り組んでいます。

専門性のある看護の提供

看護専門外来として、助産師外来・ストーマ看護専門外来・リンパ浮腫看護専門外来・下肢血管足病外来・もの忘れ外来・禁煙外来があり、それぞれ専門性の高い看護師が対応し

ています。また、肺移植外来・療法選択支援外来・パーキンソン専門外来で患者さんやご家族の相談や指導を行う外来があります。患者さんが知りたいことや悩みを相談できるよ

うに予約制を導入している外来もありますので、各外来の窓口や看護師へお声掛けください。

外来 ONE TEAM の取り組み「はっとするより、ほっとしよう」

当院は、建物の構造上、本館・新館の移動距離が長く、一日に複数の検査や受診のスケジュールで来院される方も多くいらっしゃいます。また、お一人で来院されるご高齢の患者さんもおられます。院内での外来患者さんの転倒も増えており、骨折や脳出血などの重篤な状態になる場合もありますので、病院の玄関からスタッフよりお声掛けをするようにしています。受診科相談看護師が受

診のスケジュールをコーディネートし、院内ボランティアやナースエイドによる館内移動の案内、外来受付クラークも体調確認のお声掛けをしています。患者さんが「ほっとした

気持ち」で受診をしていただけることをスタッフ一同で心掛けています。



外来
看護師長 甲斐 純美
かい あやみ

3 看護部（助産師外来）紹介 マタニティ外来・助産師外来について

マタニティ外来：お母さんの身体と心に寄り添った妊婦健診

マタニティ外来は医師とのタスクシフト、助産師のスキルアップを目指し、高度周産期医療を必要とする妊婦に切れ目ない支援を行うことを目的として、2019年6月より開設された助産師主体の妊婦健診外来です。

マタニティ外来での助産師による妊婦健診は、他施設では行われていましたが当院では初の試みでしたので、産科医師とともに対象となる妊

婦の選定基準や運営方法の見直しを何度も繰り返し、外来の質向上に努めてきました。当院産科は総合周産期母子医療センターですので、合併症や何らかの妊娠異常のある妊婦がほとんどです。助産師には妊婦・胎児の状態が正常から逸脱していないかアセスメントする力、妊婦がお母さんとしての心の準備を整え精神的な問題は無いかを察知する力が求められます。マタニティ外来での助産

師の責任は重いですが、医師主導ではなく助産師が主体となり妊婦に関わることができる外来ですので、助産師のモチベーションアップにつながっています。マタニティ外来を実践するための知識・技術的な準備や、実践を通しての経験が助産師たちを大きく成長させています。2020年度上半期のマタニティ外来受診患者数は91名で、前年度と比し実績を大きく向上させています。

助産師外来：安心・安全・幸せな育児を目指した育児支援

助産師外来は18年前に開設され、出産後のお母さんへのケアや赤ちゃんの健康評価を通して、退院後の育児不安の軽減、安心して育児ができる養育環境の調整を行っています。助産師外来では、褥婦、新生児の経過に異常は無いかを評価するとともに、お母さんが十分に母性を育み、周囲の支援を得ながら赤ちゃんに愛情を注ぐことができているかという視点で、お母さんと赤ちゃん、そし

て家族に関わっています。産後のお母さんには身体の変化や慣れない育児に大きな不安を持っている方が多いです。助産師外来で助産師に不安な思いを表出することで、また赤ちゃん向き合えるようになる方がいらっしゃいます。助産師の役割にはお母さんの心を支えるという役割もあり、お母さん方には育児を楽しみ、幸せを感じてほしいという思いで関わっています。体いっぱい力を使っ

と同じようにチームで行う必要があります。妊娠経過に異常があれば速やかに産科医師へ報告、社会的ハイリスクがあると判断すればソーシャルワーカーの協力を得るなど、多職種協働で妊産婦を支援しています。特定妊婦への支援は、2020年度からは精神科医師のアドバイスを得ながら行うことができています。多職種協働でお母さんと赤ちゃんに寄り添った妊婦健診、産後ケアを実践し2021年も助産師の技を高めていきます。



て一生懸命にお母さんのオッパイを飲む赤ちゃんの姿は、周りを幸せにしてくれます。お母さんがその幸せを感じ続けられるような育児支援を行ってまいります。

妊産婦への支援は助産師だけではできません。他の診療科の患者さん



総合周産期母子医療センター産科部門
看護師長 長谷川 まどか
はせがわ まどか